

先生なら、 どうしますか？

教師は、生徒の「どうあるべきか、どう生きていくか」という答えが1つではない問いに、生徒とともに日々向き合う。教師としての指導観を問われた「あの瞬間」を、当事者の教師が振り返る。

200人の生徒全員の担任に
なることを誓った私が、
40人を前に自問した
クラス担任としてのあり方

鳥取県立米子東高校 蓑原知也

みのはら・ともや ●同校に赴任して1年目。教頭。
英語科の教師として、協働的な学びの実現を目指した
授業づくりをいち早く実践してきた。
バスケットボールの指導にも力を入れ、
鳥取県バスケットボール協会の技術委員長を務める。

30代半ばで初めて学年主任を拝命し、1学年のクラス担任も兼務しました。最初の学年集会では、「200人全員の担任のつもりで君たちと向き合います」と、生徒の前で宣言しました。学習時間調査や校内実力テスト、模擬試験などの結果の分析に力を入れるとともに、「学力＝生活力」という信念の下、遅刻や服装の乱れなどをなぜ見逃せないか、丁寧に説明しました。200人の生徒全員に自分のことだと思って聞いてほしいという思いから、学年全体に向けた私の言葉はおのずと厳しいものになりました。学年集会が終わり、担任を務めるクラスの教室に戻ると、生徒たちは静まり返っていました。張り詰めた空気に、「私の思いは伝わっている」と手応えを感じました。

一方で私は、思うように自分のクラスの生徒たちと時間をかけて向き合えていないことを自覚していました。学年の業務を優先し、個人面談を副担任にお願いする度に、「担任だけなら、もっと生徒にかかわれるのに……」と思いました。

ある日、学年集会が終わって教室に戻る途中、「私の言葉は自分のクラスの生徒たちに本当に届いているのだろうか」という疑念が生じました。200人の前で語る言葉と、40人に向けて語る言葉は違うはず。担任としての私の顔を見せよう。私は教壇から、生徒一人ひとりの表情を確認しながら語りかけました。「1年生は家庭学習が足りないって話をしたけど、みんなは、私が担当する英語はちゃんと勉強しているから、安心しているよ」「学校の授業を信頼してほしいって話もしたけど、ここだけの話、相性が合わない先生もいるよね。そんな時は塾に頼る前に、私に相談に来てね」。そうした私の軽口は、生徒たちの表情をほぐしていきました。1人の生徒が、「数学の質問をしてもいいんですか？」と声を上げると、別の生徒が、「蓑原先生は英語の先生だよ。よくないよ！」などと口を挟みました。これまでとは違う空気が、教室を満たし始めました。

それから3年間、私はその学年の学年主任とクラス担任を受け持ちました。卒業式の日、私は生徒に、担任としての務めを十分には果たせなかったことを何度も詫言しました。いよいよ別れという時、クラス委員の合図で生徒一人ひとりが1輪のバラを手に、私の前に歩み寄りました。何人もの生徒が、「先生の厳しい話は、全部自分のことだと思って聞いていました」と言ってくれました。生徒は、40人の担任であり、200人の担任であろうとした私を理解してくれていたのです。

担任として、学年主任として、蓑原先生が追求したことは何だったのか。社会が変化中、先生が大切にしてきた学校のあり方や教師の役割も変わっていくのか。蓑原先生が語ったウェブオリジナル記事を、ぜひご覧ください。



<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article32489/>

